

出居清太郎先生のことば

※先生は、ご自身ではほとんど執筆されませんでしたので、これは、講話の記録や談話筆記、先生についての誰かの記録などです。

目次

一 敬の添うた愛、愛の添うた敬

- 1 花を敬する人が幾人あるでしょうか
- 2 生死を超越した魂の躍動が愛
- 3 今日という尊い一日
- 4 人・物・事をあなどっておりますと
- 5 人の心を味わう

- 6 私にとって役に立たない人でも
- 7 親指一本では
- 8 アラを拾うよりも実を拾う
- 9 アラを拾って浄化する
- 10 カスのような言葉というが
- 11 同じ話を何度も聞く
- 12 まだかい、じゃひとつ一緒に勉強するか
- 13 少女に、畳に手をつけてお礼を言う
- 14 マージャンの習い始め
- 15 人の行動を止めてばかりいると息が止まって冷たくなる
- 16 親は子の、子は親の
- 17 商品を、合掌して迎え、合掌して送り出す
- 18 万物尊愛―ほほえみながら仕える

1 9 靴を尊愛するとは

2 0 体内の器官をねぎらいながら眠りにつく

2 1 いやだなあと思つて掃除をする、またかと思つて仕事をする

2 2 仕事とは、「事」に「仕える」

2 3 与えられた仕事は天職

二 「今」を出発点として、前に進む

1 環境に順応して創意工夫

2 現在の環境の中でできるだけのことをする

3 太い切り株はすぐには

4 月に語る

5 いつ照るかいつよくなるかと思つよりその日その日に徳を積まれよ

6 明るい気持ちで辛抱する

- 7 たとえ苦難の道あれどほほえみながら努力ましませ
- 8 上野へ行ってごらん、お花が見事だよ
- 9 まことの交流
- 10 交流が止まると行き詰る
- 11 四つの交流
- 12 言葉は、丸く、やさしく、あたたかく
- 13 いかにかに清い水でも尿瓶で出せば飲む人はいない
- 14 基本の五音
- 15 おかげさま言えて思える人なればその日その日が無難なりけり
- 16 不平、不満、悪口は落書き
- 17 “切り言葉”を慎む
- 18 先方が留守でも
- 19 毎日毎日、進行していく

20 つかず離れず

21 今日より始め、誠の道をふみ行い、誠のわざをよろこび励む

22 いつもここにこほほえみを常に忘れず真心で日々に新たに過ごしけり

23 同じような一日だが

三 人のことを先にする

1 弱い困っている人の救済に捧げ尽くす

2 大晦日に正月餅をすっぽりと

3 魂に刻み込まれた刹那刹那の感激は、消えることなく生き続ける

4 徳を積めば、必要なものが、必要な時にさずかる

5 徳積めばいかに苦勞の道あれどいずれ花咲き実りくるなり

6 歯・肩・頭の痛みと高熱の中で

7 二等車にみすぼらしい身なりの婦人が

- 8 「帽子がないよ」「ええありませんね」
- 9 人のあと片付けをしてあげる
- 10 足りないものを足してあげる
- 11 言わないんじゃないんで、言えないんだ
- 12 「他自」ともに
- 13 喜びを人に与える人たちはいずれの世にか幸になるなり
- 14 お互いに我さえよくばよきことと思う心が病めてくるなり
- 15 あちら立てればこちらが立たず
- 16 八方ふさがついても天はあいている
- 17 「そのお茶は人様に差し上げてください」
- 18 人と人とが和合するには
- 19 手を机にピツタリつければ影は出ない
- 20 家業にはげむこと

2 1 「にんべん」に「為」と書けば「偽」（いつわり）となる

2 2 いつまでも物や名譽にとらわれず誠のわざに励みませ

2 3 真心でなしたるわざはいつの世か照り輝いて栄えゆくなり

2 4 「為にする」のではなく、「させていただく」

2 5 難しいことを何心なくやさしく行う、これが誠である

2 6 人種、国籍、信教を超えて

2 7 世界平和はわが言語動作にある

2 8 平和の礎は一人一人の心の中に刻み込むもの

四 つきたての餅のような心

1 ころころ変わるは心です

2 つきたての餅のような心

3 “さかしま心”を持つか持たぬかが幸と不幸の分岐点

- 4 心が変われば環境が変わります
- 5 心の点検を怠けていては危ない
- 6 カメラのレンズが曇っていれは正しい映像を結ばない
- 7 不平を思わず、不満を言わず
- 8 不平を持たず、持たさず
- 9 猫でさえも白い飯を食べているのに…
- 10 うちのねえやは正直者で本当のことを言うなあ…
- 11 あの人の足はマメに動いているなあ
- 12 すべて「ええよう（良いよう）」に受け取る
- 13 水のような心になるように
- 14 人から言われたことが気になるのは
- 15 高い心は不安定
- 16 神への降伏が人間の幸福

17 心で心を見直す

18 見たい見たいと思うなら、おのが心の中を見よ

五 松の木は曲がったままで真つすぐだ

1 「砂糖は辛いね」

2 複線になりなさい

3 「思い」を放してみる

4 茶ピンのつるは曲がっていても正しくついている

5 松の木は曲がったままで真つすぐだ

6 世の中には、あの方（型）、この方（型）、いろんな方（型）がいる

7 ここに金遣いの荒い人がある

8 その人の心の幅、奥行きによって、ものの見方が違ってくる

9 人を、おかしく、狂っていると思うのは

10 人を見てとやかく批判している間は

11 人を見てどうやこうやと語るよりおのが務めに努力まします

六 二つで一つの理

1 「なぜこの人は言うことを聞かないのだろう」

2 映像のフィルムはこちらにある

3 自己の足りないところを、他人が見せてくれる

4 合わせ鏡

5 見せられるのは、見せていただいている

6 「二つで一つ」の理

7 見事に差し上げて、上手にいただく

8 一方だけにとらわれない「二つ・一つ」の世界観

9 人の道と神の道

10 生死は一如である

11 「魂の存在」に開眼

七 ナスの種を蒔いて、ウリはならない

1 胸三寸に整然たる宇宙の秩序が

2 すべて心通りに現われる

3 なつてくることを感謝して受け取りなさい

4 花を見て喜ぶ人は数あれど花を咲かせたもとを知らねば

5 ナスの種を蒔いて、ウリはならない

6 無意識に蒔いた種もいづれ芽ばえる

7 お互いに今さえよくばよきことと思う心は幸にならざる

8 一つの行いをして、それが行方知れずになることはない

9 天のテープには、一音の漏れ落ちもなく収められている

10 天のソロバン勘定には寸分の狂いもない

11 世の中、不公平はない

12 事故を起こすような車には乗り合わさない

八 生かされて生きている

1 手のひらを通してネズミの感触が伝わってくる

2 私は天地自然、万物と融合一体

3 人間は生かされて生きている

4 生まれるも死するもすべて神のわざ人のなすべきことにあらざる

5 生きる道生かされる道両道を学び修めて励みませ

6 山海の珍味を口に入れても

7 家のある人もない人も、富のある人のない人も、同じく生かされている。

8 天地自然の「誠」は万物を生かしめること

9 米や水や空気の味

10 一人一人に幸せに通じる道筋がある

11 厳しくとも通れない道はない

12 取越し苦勞はいらない

13 お互いに悲しきときがありしともみ親はつねに守りまします

14 幾万のあだなす人がありしともいのちの親は救いまします

15 縁結び誰がするかと思うなよ神の力で神がするなり

16 艱難辛苦があればこそ前進できる

17 難有つて、有難い

18 雨もあり嵐もありて草も木も強く正しく伸びてゆくなり

19 のびのびと伸びゆくなかにひと苦勞そこに大きな慈愛あるなり

20 明日どんなことが起きようとすべて神の配慮

21 ほめられたら反省、しかられたら感謝、行き詰ったら実行

22 自分に向かって言われたことでなくても

23 天に口なし、人をもつて言わしむ

24 目の前に現われることのすべてが教えてくれる

25 子供が寝ているのではない、神が寝かせてくださっている

26 妻が病んでいるのは

27 病む人よ病まれる人よ二方よもとをただせば一つなりけり

28 「あつちも降っているよ」

29 天地の理法を師として、一生学び続ける

30 真心から、信念を持って行こう

31 春を楽しみに丹精する

補遺 心に唱えることば

1 心に唱えることばA―進み行こう

- 2 心に唱えることばB―見つめる
- 3 心に唱えることばC―祈る

一、敬の添うた愛、愛の添うた敬

ひとは、毎日毎日、一瞬一瞬、人と会い、物に対し、事と向き合う。それらはいつもの慣れ親しんだものであったり、行きずりの一回限りのものであったりさまざまだが、それらとの対応が生活であり、その積み重なりが人生と言えるだろう。（編者つぶやき）

1 花を敬する人が幾人あるでしょうか

花を愛する人は多いでしょうが、花を敬する人が幾人あるでしょうか。

花が咲いている。ああ美しいなあと思わず足を止める。その時は身も心も花の美しさ

に奪われています。しかしただ美しいと見、思うだけでは足りないのであつて、可憐な花一輪が持っているすばらしさを、果たして万物の霊長をもつて任じている自分が持っているかどうか、言語動作に、心の交流に、こういう純真な美しさがあるかどうか、こう反省するときに、おのずから花に尊敬が生まれてくるのであります。

私は常に、「万物を尊敬、愛していきなさい」と申しています。敬にも愛にも偏らない、敬の添うた愛、愛の添うた敬、これではなくてはなりません。

2 生死を超越した魂の躍動が愛

美しい花を美しいと眺めるだけでは愛ではない。美しい花があれば、その花の育ちを、その花の努力を、自分の心の中にしっかりと刻みこんで、自らの努力と自らの育ちに役立ててこそ、花への愛がある。

花への愛で心が動かされ、心の扉がおし開かれる。とどまってはいられない。人と人との愛もこのようでありたい。

愛による独占、愛による盲目、これらは愛の、より真なるあり方ではない。愛による進歩、愛による向上、これがなくては真の愛とは言えない。愛は死よりも尊し、と私はよく語る。生死を超越した魂の躍動が愛だからこの言葉が出ている。

むつかしいことではない。今日一日、少しでも広い、あたたかい心を持てるように、その努力をすれば、愛はその人の心に次第次第に宿ってくるものである。

3 今日という尊い一日

一日生涯であります。この今日という一日はまことに尊い一日であります。その一日を生き生かされているこの身もまた尊く、この身をかくあらしめている万人、万物また尊いのであります。こういう情緒から「敬」と「愛」が生まれてくるのであります。

4 人・物・事をあなどっている

人をあなどっておりますと、人の言語動作を学び修めていけません。

物をあなどつておりますと、物に恵まれず、物に守っていただけません。

事をあなどつていきますと、事業に失敗し、後悔だけが残ります。

人に、物に、事に、すべてに敬愛の心をそそいでいくのが自然の法則に合った生き方でありますから、「仕合せ」（幸せ）になってくるのであります。

5 人の心を味わう

人のふり見てわがふり直せ、と言われる。人を見て、よい点はまねをし、悪い点は直す。しかしこれだけでは十分ではありません。

人の言動を見聞きするだけでなく、その人の心をよく味わうことが大切です。そのためには、人の心に裸になって飛び込んでいかねばなりません。酔っぱらって暴言を吐く人でも、その人の心を深く味わってみると、その人を大切にしてあげようという気持ちになれるのです。

心の浅い所へ入っただけではパシャパシャと音ばかり大きくて、飛沫が立つばかりで

す。海の奥底深い所まで飛び込んでみると泳ぎやすいようなもので、人の心も奥深く入ってみると、しみじみと味わうことができます。

皆様も、どうかよく人の心を味わって下さい。それが心の栄養になります。そして心に味がついてまいります。味のある人はそれだけ人に愛されます。

6 私にとって役に立たない人でも

私にとって役に立たない人でも、他の人の役に立っている。私には敵になっても、他の人に対しては恩人だ。そういうところを考えねばならない。そういう広い心を養っていくところにまた幸せがある。

7 親指一本では

親指がいかに力があるといっても、親指一本では紙一枚持てない。他の指の協力を得てはじめて物がもてるのである。

8 アラを拾うよりも実を拾う

人のアラを拾うよりも、人の実を拾う勉強をしたい。人のアラを拾っていて、いつも明るいはほほえみをたたえていることは難しい。どんな場合でも、どんな場所でも、いつもほほえんでいられるのは、常日頃から、人の実ばかりを拾っているからである。ほほえみを忘れないように勉強するために、まず、人の実を拾う勉強をしよう。

9 アラを拾って浄化する

人のアラを拾うなと言うが、指導者は人のアラを拾ってあげて、これを浄化し、肥やしにして役立てる。これが人の上に立つ人のあり方である。

10 カスのような言葉というが

カスのような言葉と言いますが、本当はそのような言葉はないのです。ただ、聞く人がカスのような言葉だと思っただけなのです。カスのような言葉として受け取っていたのでは、そこから養分を取ることになるはずがありません。

カスとも思わぬも、その人の心の持ち方ひとつですが、カスと思ったときから、カスはカスだけになってしまふのです。カスもあるうが、カスばかりではないはずだ、どこかに役に立つものがあるはずだという心で、何事も見られるときに、万物を尊び愛することができます。

11 同じ話を何度も聞く

同じ話を何回も聞くと、ああまたあの話かと、話だけでなく、話す人までも軽蔑してしまう。これが二回も三回にもなるとどうだろうか。「もうその話はわかっている」と、否定することにもなりかねない。それは話を聞くのに「我意」を用いているからである。われわれは生れてから死ぬまで、同じ味の空気を吸い、水を飲み、米のご飯を食べている。それでいて、あきることがない。

まことの話を、まごころで聞かざらば、同じ話でもあきることはないはずである。初めて聞いた時の感激も、二回聞いた時の感激も少しも変わらないというのが“まご

と”の聞き方である。

12 まだかい、じゃひとつ一緒に勉強するか

簡単な日常の会話ですが、「勉強しましたか」「していません」という親子の問答ですね。「していません」と子供が答えると、「なぜしないんだ。ダメじゃないか、いつも言っているのに。早く勉強しなさい」と押しつける親がありますね。「まだかい、じゃひとつ一緒に勉強するか」と勉強を見てあげるなり、自分も勉強するなりして、というのが愛なんです。

子供は、親の言うとおりにハマらない。親のするとおりになりません。

13 少女に、豊に手をつけてお礼を言う

ある時、先生が歯の治療を受けられました。そのことを知った少女が、先生が治療を受けられている歯科医院の窓の外で、先生の歯が痛みませんようにとお祈りをしました。

次の日、その少女に会った先生は、「昨日は私のためにお祈りをしてくれてありがとう」と、畳に手をつけてお礼を言われました。

14 マージャンの習い始め

ある母親が、「息子が賭けマージャンをして困っています。どうかおたすけください」と泣きついてきたことがある。折を見てその家をたずね、「私にマージャンを教えてほしい」とその息子に申し込んだ。母親はあきれていた。止めにきたはずの私が当人とマージャンをやるうというのだから、あきれるのは当然である。「そんなことをお願いしたのではありません」と私を責めたが、とうとう私はその息子とマージャンの卓を囲み、初めて牌というものを手にした。

帰る時、その息子の靴を出してもらい、磨いてあげた。マージャンに狂っていたその息子は、私の姿を見て涙を流していた。私は靴にブラシをかけながら、その息子に、

「賭けマージャンをやめなさい。「賭ける」というのは、「欠ける」ことになって、

護国の神となられたお父さんの徳を欠いていくからね。賭けるかわりに景品を出すようにするのだね。

と言った。これが私のマージャンの習い始めであった。

15 人の行動を止めてばかりいると息が止まって冷たくなる

生きたい―これは人の本能である。

行きたい―これもまた、人の願いである。

「飲みに行きたい…」この願望を止めると行き詰まりが来る。止めるよりも、自分も一緒にそこへ行って調べてみることを協力という。この協力は愛情である。愛情はあたたかい心である。愛情を失って事ごとに「やめなさい」「行ってはなりません」と人の行動を止めてばかりいると息が止まって冷たくなる。

子ども連れの母親と話していると、子どもがしきりに「帰ろう、帰ろう」という。話の途中である。母親は困っていた。

——先生、帰ってもよいのですか。

——「帰る」というのは、その処を「変える」ことですよ。ここから玄関まで行って、またここにもどつてきなさい。

16 親は子の、子は親の

——青年たちは就職先を、少年たちは受験する高校・大学を決める頃です。本人や親が、人生の岐路で方向を決める時の心構えをお話してください。

先生 まず親はね、本人の希望を聞いてあげる。息子さんが商社に行きたいと言うのならその心におまかせすればよい。

——親は、子どもはまだ世間を知らないからと心配します。

先生 それはわが子だという“我”があるからです。子どもは神の子ですから、神の子の心におまかせするのです。

——それでは立場をかえて、子の方、本人は親たちの言葉に煩わされず、自分の心に

聞けばよいのですね。

先生 子はまず親の言葉を聞くのです。

——親には子の心におまかせしなさいと言い、子には親の言葉を聞けとおっしゃると、矛盾しやしませんか。

先生 理屈で考えるから矛盾するのです。親も子も神の子です。親は子の心におまかせする、これは神の子として尊重することです。子も親の言葉は素直に聞いて親を尊ぶ。

神の子と神の子が尊重し合って、話し合って決める。そうすれば間違いがありません。

17 商品を、合掌して迎え、合掌して送り出す

商店に行ってみますと、商品が送り届けられる時に遭うことがあります。見ていると、主人も使用人も、邪魔ものが入ってきたというわけでもないでしょうが、置き所もないのに困ったなあという顔をして、「その辺に置いて下さい」と言っております。

その商品が動かねば商売が成り立たないのに、邪魔者扱いをしています。これでは商品がうまく回転していかないのは当たり前でしょう。

入ってきた商品を先ず合掌して迎える。これが誠のわざではないでしょうか。出て行く商品を合掌して送り出す。これが誠の心ではないでしょうか。商品の一つ一つに誠の念を通わせてはじめて、商品がまことの働きをします。

18 万物尊愛―ほほえみながら仕える

一滴の水、一粒の米、これを尊ぶ、愛する。これを「万物尊愛」と教えております。一粒の米、一滴の水にも、ほほえみながら仕えていく。これが誠のわざであります。また物だけの仕えではなくて、心の持ち方、言葉の使い方、身の動かし方、耳の働かせ方、目の働かせ方、すべて言語動作というものは、不平もなく、不満もなく、怒りも嫉妬もなく、利害打算をこえて何心なく無になって行っていく、誠のわざでなくてはなりません。

19 靴を尊愛するとは

靴を愛する、尊敬する心があれば、靴箱を買ってそこにに入れてあげる。靴の住居を作
ってあげるのです。

下駄一足にも、自分の足の護られた労を謝し、その後は汚れをふいて大切に片づけて
おく心掛けが必要である。

20 体内の器官をねぎらいながら眠りにつく

体内に寸暇なく働く器官に対して、夜寝る前に「ごくろうさま」と心からなる感謝を
捧げ、なでさすりつつ労をねぎらいながら眠りにつく人は、後始末のできた人で、底の
ある人である。かかる人は、健康という徳がたくわえられていくのである。

21 いやだなあと思っ て掃除をする、またかと思っ て仕事を する

私たちは一日のうちでも、知らず知らずに、“さかしま心”で行なっていることがど
れほどあるか知れません。いやだなあと思っ
て掃除をする、またかと思っ
て仕事を
する、

身体は動いておりますが、心の中に“さかしま”の種があります。ですから行き詰る。

22 仕事とは、「事」に「仕える」

仕事をするとは、事に「仕える」こと。こんな仕事、あんな仕事というこだわりなく、報酬がどうの、待遇がこうのという不平不満なく、与えられた仕事に、ほほえみながら邁進することが誠のわざです。

23 与えられた仕事は天職

自分の天職はなんであろうかと思いつまず、与えられた仕事は天職だと思い、笑って働くことである。

二、「今」を出発点として、前に進む

今、自分が立っている位置を、何らかの尺度で測ったにしても、測れなかったにしても、より上に上がるために一步を踏み出すことは、いまだどこにしようといふことができることだろう。(編者つぶやき)

1 環境に順応して創意工夫

大正9年(1920)、徴兵を受けて入営する前の五年間、私は新宿周辺でさまざまな勤労をした。新聞配達をすれば、ただちにその環境にとけこみ、誰もがまねられないような最上の配達をした。配達先の玄関を見て、はきものが乱れておれば整頓した。

環境に順応するとは、無為無策のまま慣れてしまうということではない。そこに生きがいを感じ、歓喜を見いだしていくことである。その時その時の生き方に誠を凝結することである。すると思わぬ知恵がわいてくる。仕事の仕方にも人の意表をついた工夫が生まれてくる。

環境に不平不満を持っている場合は、いつまでもその環境から卒業できない。タラタ

ラと日を送り、タラタラと一生を暮してしまふ。一生懸命やるから卒業も早い。一つ卒業すると、また新しい環境に飛び込む。ここでもまた一生懸命にやる。おのずから卓抜した工夫が生まれて、これもまたたく間に卒業するというわけで、人生の展開が早い。こうなると仕事も面白いし、人生も楽しい。

2 現在の環境の中で、できるだけの努力をする

人生は一日が一代です。朝起きる時は生まれる時、夜寝る時は死ぬる時。だから一日一日を楽しむのです。

その根本は現在の環境に順応すること、これが修養の極意です。そしてその環境の中で、できるだけだけの努力をします。次に来るべき新しい環境は、自然に、その功績として生まれてきます。

3 太い切り株はすぐには

死ぬほどひどい目にあわされたといううらみはちょうど太い切り株のようなものであ

りまして、取ればよいとわかっていても、根を張っていて掘り出すのは容易ではありません。二年三年とたてば根も枯れ、回りの土も柔らかくなって掘り出せる時期が来るのです。それまで、いつか西瓜やメロンの実る時を楽しみに待つのです。これが「真棒」(辛抱)であります。

切り株を取り出してからと言わずに、春が来たら、やせた土地でもその土地なりに一番良い作物の種を蒔くのです。秋が来ればささやかでも収穫を市場に送り出してお役に立てる。そしてまた次の作物を作る。そして次第に地味豊かな畠になっていく。これが修養であり、生活なのであります。

4 月に語る

お月様、あなたの所へまいりまして私の悩みを聞いていただきたいと思います。大勢の人々の悩みがこの身一つに集まってまいりまして、どのように浄化していいのやら悩んでいます。なれども遠い遠いので、まいることもできませんが、お月様には見抜き見

通しで、私の心の迷いも、そばまでまいりまして聞いていただかなくてもわかっていただけると思います。なれどもわかつていただけただけでは何だかものたりません。何かお月様から言葉をいただきたいと思う気持ちでいっぱいでございます。

お月様はいつも、私一人の心だけでなく、万人の人の心がよくわかってくださると思います。お月様が一夜でもあらわれていただけないと、この世も暗闇になると同じに、私の心も暗闇になります。お月様もまた、いくら光明を万人に差し上げたいと思っても、あの真つ黒い雲がお月様をかくしてしまえばどうすることもできないと思います。私も、いつも明るい、まんまるい、円満な気持ちになりたいと思っても、真つ黒い苦勞が重なりますと、心が明るくなりません。

黒い黒い雲がはやく走り去ってしまえばはやく明るくなるのにと、あせる気持ちが出てまいります。私の暗い悩みの心もそれと同じであります、この悩みの心、この暗闇の黒い黒い雲のような苦勞をひとときに取り去ろうと思うのは無理な考えだと悟りました。

黒い雲が走り去ってゆくまで、静かに反省していくべきことを心の底から悟らせていただきました。ありがとうございました。

5 いつ照るかいつよくなるかと思うよりその日その日に徳を積まれよ

6 明るい気持ちで辛抱する

握りこぶしのような固い、冷たい心で我慢するというのは行き詰まります。どのような環境にあっても、たなごころを開いたような明るい、あたたかい心で「真棒」（辛抱）するところに道が開けてきます。

7 たとえ苦難の道あれどほほえみながら努力ましませ

8 上野へ行ってごらん、お花が見事だよ

「上野へ行ってごらん、お花が見事だよ」と言われたら、そうですかと素直に行けば

よい。行って見たが、花は既に散っていた。しかしそこで旧友と偶然出会った。「いやア、久しぶりだね、一緒に食事しよう」ということになる。桜は見なかったが、友と会ったのは花を見たことである。

9 まことの交流

ある婦人が、人から美しいハンカチをもらったので、「あなた嬉しいでしょう」とたずねた。すると、「今は汗の時節ではないし、私も持っているのです、それほど嬉しいとは思いません」ということであつた。たとえ持つについても人様から親切を受けたならば、気持ちよく素直に頂戴できるような心になりたいためである。人の親切をもつたいたなく頂戴し、それ以上のものをお返しするのをまことの交流という。

このようなまことの交流を行っている、必要な時に、必要なだけ、物もお金も人もさずかる。

10 交流が止まると行き詰る

交流が止まると行き詰りが生ずる。目上の人や恩人への交流、親。祖先への交流（墓参り）が足らないと、事業的にも行き詰りになってくる。入学、就職、結婚などいろいろな場合の遅れにもつながる。

入学、就職、結婚などに関して縁をつなげていただいた方々へのつなぎ（感謝の心をあらわす、足をはこぶ）を忘れてはならない。

11 四つの交流

心の交流、言葉の交流、物の交流、身体の交流の四つの交流を、人の喜ぶように心がける。これを「四合わせ」（幸せ）という。

ある日、会館でテーブルに座っていると、当番の婦人が心をこめたご馳走をこしらえて私の前に持ってきた。料理を美しく盛り上げた皿を、黙って私の前に置いて引き下がっていくので、「大事なことを忘れていませんか」と言ったが、当人は何のことかわか

らぬ様子である。「あなたは心と身体と物の交流は行った。ご馳走してさしあげたいという心、それを作ってここまで持ってきた身体の動き、そしてご馳走という物―たしかに三つの交流はできているが、言葉の交流を忘れているでしょう。“どうぞおありがとうございます”という言葉を忘れていてしょう。三つの交流ができて一つ欠けていると全きものにはなりませんでしょう」と教えた。

1 2 言葉は、丸く、やさしく、あたたかく。

1 3 いかに清い水でも尿瓶で出せば飲む人はいない。

1 4 基本の五音

物の無駄遣いばかりでなく、言い訳や自分をかざる言葉など、言葉の無駄遣いも多い。

- ① 「こんにちは」と明るく挨拶する。
- ② 「はい」と素直に返事する。
- ③ 「ありがとう

う」と感謝する。④「ごくろうさま」と相手を思いやる。⑤「おかげさま」と謙虚な心を持つ。これが毎日出す言葉の基本である。

15 おかげさま言えて思える人なればその日その日が無難なりけり

16 不平、不満、悪口は落書き

不平、不満、悪口を言うことは、相手の心にも自分の心にも落書きをしているようなものである。

17 “切り言葉”を慎む

人の話しに割り込んだり、人の行動を妨げたりするような“切り言葉”を慎むように厳しく教えております。言葉は、どこまでもつないでいけるように使うのが、言葉の交流の真のあり方です。もちろん切らねばならぬ場合もある。その場合は、切って役に立

つように切る。役に立たぬ切り方をしてはいけない。また、切ったらつなぐ。

18 先方が留守でも

行き通う場合、先方が留守でも、門まで行って帰ってくるようなことがあっても、誠は通じるものであるから、相手がいるいないにかかわらず、努めるべき道はどこまでも喜んで努められるよう、留守であっても喜んで帰れるよう修養すべきである。

19 毎日毎日、進行していく

天地の運行に停滞はない。人も動くことが天地の運行に沿うことになる。毎日、毎日、進行していく。よどみ、とどこおりなく進行していく。そして新しいことを発見していく。じつと立ったままでいて、新しいものが見えるわけではない。どんどん進行していくのはじめて、新しいものが見いだせるのである。進行は「いきおい」である。正しい心で、正しく進行する。前進する。そのいきおいには誰も勝てない。しかし、

自己流の考えから、怒ってみさかいなく前進すると「事故」となる。

20 つかず離れず

太陽はいつも同じように進んでいるでしょう。早くなったり、ゆっくりしたりしないで、いつも同じに進んでいます。人も、喜びすぎて進み過ぎたり、悲しみすぎて遅れたりしないで、いつも同じような平らかな気持ちで、つかず離れずいくのがいいですよ。

21 今日より始め、誠の道をふみ行い、誠のわざをよろこび励む

22 いつもにこにこほほえみを常に忘れず真心で日々に新たに過ごしけり

23 同じような一日だが

立派な人生を歩んでいる人も、だんだん落伍していつている人も、やはり三度の食事

をし、仕事をしたり遊んだりしている。人生はほとんどこんな一日から成り立っています。ちよつと見た目には、二人の一日に大差はありません。それがいつしか大きな差になる。

それはやはり、生活の一コマ一コマが、魂と心と肉体の生成発展になっているかどうかの違いなのです。お酒一杯飲むにしても、心身を養ったか暴飲になったかの違いです。苦しい時にもほほえみを失わなかったかどうかの違いです。

ガンと宣告され、残り少ない毎日を大切に生きた方の記録があります。しかし、明日のある今日一日も、明日のない今日一日も、その大切さに変わりはありません。かけがえのない今日一日を、新しく修め養うよう努力しなければならないのです。

三、人のことを先にする

親は、わが子が病気で苦しんでいれば替わってやりたいと思ひ、お

いしい物も一つしかなければ子どもに食べさせて満足する。では隣人
に対しては……。 (编者つぶやき)

1 弱い困っている人々に捧げ尽くす

(大正15年(1926)、先生26歳の頃のことを次のように述懐されています。)

自分一人の寝食はもはや問題ではなかった。お助けによって入ってくる若干のお布施も、ほとんど右から左と困窮者へ流れていって、私の懐中には残らなかった。寺島の下宿の黒い鉄鍋には、野菜くずと粉ばかりの雑炊や、たまに芋の塩煮つけが入っているばかりだった。よくパンの切れ端も買った。十銭も出せば一貫目ほどもらえたので、根気よくかじったものである。

当時岸本さんという婦人がいた。気の毒な境遇で、夫を亡くしてからは、子ども相手の駄菓子屋をあきないながら小学校一年になる女の子を抱えて暮らしておった。その娘が脳脊髄膜炎をわずらって医者からも見放されていたので、その母子を助けるた

め、私は寺島から大塚坂下まで通い詰めた。

後年、岸本さんと思い出を語り合ったことがある。

「寺島から毎日通ったね。歩いて帰ったこともあったね。」

「たまに新しい下駄をはいておいでだと思っていると、すぐ人にあげてしまい、ご自分はいつも古い草履のような下駄をはいていらして。」

「そうだね。袴もはいてはいたが、袴というだけのもので、セル地のヨレヨレになった見苦しいものでね。」

「それに、いらっしやるたびに財布をはたいて娘にお小遣いだといって下さり、歩いてお帰りなんですよ。」

「そういうこともあったかね。」

「お宅に伺いますと、お米をたかないで、大鍋にジャガイモが煮てあったり、パンの切れ端を食べていたりのお暮しの中でも、私たちにはあるだけのものを出して喜ばせて下さったものです。数々のご恩は忘れようがありません。」

そういう生活であった。

若い元気のよい私は、弱い困っている人々に、己が肉をさき血を与えていくことにただ喜びをおぼえておった。今日裸になってしまえば明日どうなるであろうかと考えたこともなかった。

毎日毎日「一」に立って、「一」から新しく進んだ。

2 大晦日に正月餅をすっぽりと

（先生の、このような捧げ尽くす生活は、昭和4年（1929）、26歳で菊の夫人と結婚されてからも変わることはありませんでした。）

昼間は菊のと二人、生きるための働きであったが、夕食をすますと夜更けまでの数時間は本職にかえって、向島方面あるいは板橋、大塚へと歩き回っていた。全くよく歩いた。電車に乗るのは特別な場合で、歩くのが私たちの常識になっていた。一里でも二里でも、時間がかかるとも、それでは疲れて明日の仕事にさしつかえるとも、さらに考え

もしなかった。どこまでも「今日一日の生涯」を、思い切り生きぬくだけであった

私たちの回りには窮乏の底にいる人たちが多く、私たち二人は梅干し二つで一日をしのいで、ほとんどをその人たちに捧げ尽くした。中でも大塚の山崎さん夫婦の困りようがひどかった。年老いて身寄りもなく、その上に夫人が中風に倒れたのである。もはや見捨てておくことができず、二人を引きとった。菊のにとっては負担がまた一つ増えたわけであったが、親切にかいがいしくその世話をした。時には工場を休んで、下の世話をし、汚れ物を洗っていた。全く献身的な奉仕であった。

またある大晦日の夜であった。貧しい老婆が来て、くどくどと泣き言を並べた。年の瀬も押し詰まったのに主人や倅に働きがなく、越すに越せないと言って泣いた。そばで聞いていた菊のが、「お婆さん、これ持つてお行き」と言つて、四十切れほどの切り餅を風呂敷包みにして渡した。老婆はうろたえた。「いえ、そんなつもりで申したのでございます。それではあまりに…」「私たちのことならいいのよ。いくらでもあるのだからね。」実はそれが正月餅のすべてであった。あとには一枚の餅も残っていないなかつ

た。老婆は何度も礼を言って帰っていった。

「いいわね、明日の元日はお餅なしだけど。」

「うむ、いいよ。」

としか言えなかった。

正月できぬと言つて嘆く人と、自分の正月をすっぽり人に与えて喜んでいる人と、そこに二つの人生があった。そこに餅が動いただけで、双方ともに明るい元日を迎えたことを考えると、「喜び」の理において一つであった。

私は、菊のの美しい魂にどれほど教えられたか知れない。無条件に頭を下げたい思いでいっぱいであった。

餅はなくても元日はやって来た。いつものようにご飯とお汁、少しのお煮しめだけでお祝いをしていると、一人の人が挨拶に来て、鏡餅を置いていった。

「私たちには、やっぱりお餅があるのね」と言う菊のの聲が明るかった。

無一物という事実においては、大晦日の夜から元日の朝にかけての私たちも老婆と同

じであった。しかし、私たちには、黙っていても入ってくる理があった。元日からあらためて、

―理さえあれば何も心配はいらない。毎日毎日、この理をこしらえていく、理につながっていく努力をしていこう。

と強く心に誓った。

3 魂に刻み込まれた刹那刹那の感激は、消えることなく生き続ける

その一年（昭和二〇〜二一年）の間に、ずいぶん多くの人々がいのちの親のお慈悲に浴した。堀之内さんが生き証人である。だから、「先生と奥様との血肉を削るような誠、真実を頂いてお救いを受けた人々が、どうでしょう一人もついてきておりません。これは一体どういうことなんでしょう」と嘆くのである。

どうもこうもない、それでよいのだ。それでこそ私は少しばかり徳を積めたのである。心血を注いだ甲斐もなく、その人々に去っていかれ、悪口を言われ、食い逃げされ、

「ああ、よかったね」と言えて初めて一つの徳である。

堀之内さんが嘆くのは無理もなかった。彼女は極度に緊迫した私の活動を目撃しておった。火の玉になって飛び回っていた私と、そこに現れた奇跡を見ておった。その印象が強烈であればあるほど、現実の虚しさに耐えかねるのであった。私は、いいんだよ、誰も来なくていいんだよ、そればかりでなく刑務所に入れられて（軍部批判による不敬罪、治安維持法違反―そのため人々が寄りつかなくなった）それでいいんだよ、すべて神の計らいであって尊いことなんだよ、としておった。

私の持てる限りの徳と愛と力とは、ただ無条件に与えつ放しでよいのであった。報いを求めてはならなかった。欲してはならなかった。人の目にはむなしく見えるその業の中に、ただ一つ、目に見えない「徳」だけが残って行くのである。

堀之内さんの言うように その頃の人々はほとんど散ってしまつて今は跡形もない。しかし私と妻菊のとの魂に刻み込まれた刹那刹那の感激は、永劫に消えることなく生き続ける。これが魂の輝きであり、徳である。

私が最も希求していたのは徳であつた。お金よりも会員の数よりも、まず、われ自らの徳が欲しかつた。その徳を積むただ一つの道が無条件の人助けであつてみれば、ただ人々の救済に身を捧げていくだけでよかつたのである。私はまだまだ磨きをかけられる、そのための試練はどこまで続くのか分からないと思つていた。

実を結ばない救済も、刑務所行きも、その度に崩れ去つた会の姿も、全てが神慮の計らいであつた。神慮の計らいならば、喜んでいただいていってこそ神の子である。親が子のためになさるわざに悪いことがあるはずはない。感謝で受けて通り抜けて徳となるのだと考へていた。

4 徳を積みめば、必要なものが、必要な時にさずかる。

5 徳積みめばいかに苦勞の道あれどいずれ花咲き実りくるなり

6 歯・肩・頭の痛みと高熱の中で

(やがて日中戦争から太平洋戦争、そして戦後の時代へと時は移りましたが、「人のことを先にする」先生の姿に少しのゆるみもありませんでした。いやむしろ昭和二〇年に先生を慕う人たちによって現在の修養団捧誠会が組織されて以来、各地に支部ができ、会員が増加するとともに、先生の活動範囲は、車、列車、飛行機を使っていますますます広がっていきました。各地の会員たちは先生の来訪を待ちわび、先生を喜び迎えました。)

十五日の夜は高熱に悩んだ。歯と肩と頭との痛みによる熱であった。十六日も十七日も休まずに、訪ねてくる会員と語り、悩みをうったえる会員を指導した。苦しくとも、気分が重苦しくとも、いつものように笑顔を見せて耐えた。

「私はとても起きておれない。休ませてもらう」と言ってしまうばそれですんだことであろう。しかし、悩める世の中の、悩める人々の顔をみれば、それは言えなかった。教えの親はどこまでもあたたかい言葉で抱きかかえていくのが、たった一つの道であっ

た。

7 二等車にみすぼらしい身なりの婦人が

終戦後まだ間もない昭和33年頃のことである。新潟行きの汽車（二等車）に乗っていると高崎駅で七つぐらいと四つぐらいの二人の子供を連れ、風呂敷包み一つと、明治時代の遺物らしい古ぼけた鞆を持って、みすぼらしい身なりの婦人が乗ってきた。どう見ても二等客らしくない姿であった。腰を下ろそうとすると、その前に座っていた紳士が「ここは二等車ですよ」と教えた。すると婦人は「二等、三等ぐらい分かっていますよ」と言い、古ぼけた垢まみれの財布から青切符を出して「この切符でここに乘っては悪いのですか」と決めつけた。紳士は「すみません」と謝り、きまり悪そうな様子で席を変えてしまった。

「この人よほど気持ちが悪がっている、ひねくれている。なんとか和やかにしてあげたいものだ…」

と私は思った。そのうち五分ほど停車する駅に着いたので、

「どちらへおいでになるのですか」

と聞くと、

「私の行き先を調べてどうするんですか。あなたは警察の人ですか」

と決めつけられた。もつともなことであると思ったので、「すみません」と詫びたが、何とかしてこじれた気持ちを解きほぐしてあげたいものだと思い続けた。やがて長岡近くまで来ると下車の用意を始めたので、「荷物を持ちましょうか」と言うと、「いいです」とけんもほろろに断られた。そこで今度は何も言わずに網棚の荷物を降ろし、四つぐらいの下の子を抱いてホームに降ろしてあげた。すると婦人は、ホームの大勢の人中で声をあげて泣き出し、

「こんな仏様のような旦那様に巡り合ったことはありません…」

と私は思わぬお褒めの言葉を頂戴した。

人に対する親切はここである。相手がどう出ようと最後の最後まで努力する。これが

「まことのわざ」である。途中であいそをつかして匙を投げてしまつては結論が出ない。不愉快な思い出だけが残るばかりである。

8 「帽子がないよ」「ええありませんね」

ある婦人に、「ご主人を送りに玄関まで出て行つたとき、いつも帽子を掛けてある釘に帽子がかかつていなかった。あなたのご主人が『帽子がないよ』と言つたとき、『ええありませんね』と言つていただけではならない」とお話ししたことがある。

ないものはない、あるものはある。これは正直なことである。正直ではあるが、正直なだけである。愛がない。愛があれば、ありませんねと言つている間に、もう立つて探しに行くはずだ。

9 人のあと後片付けをしてあげる

あと片付けをさせてもらう、あるいは手伝つてあげることによって各人の徳が高まり、心の力がついてくるのである。良い気持ちを差し上げ、手伝つてあげるという実行が尊

いのである。仕事のあと片付けは目に見えるが、目に見えない、気持ちのあと片付け、心のあと片付けに注意せねばならぬ。人が腹を立てた時、自分も腹を立てるようではない。人が腹を立てれば、自分はそのあと片付けとして、和やかな心で接することが大事である。

10 足りないものを足してあげる

― 先生が会員を指導されている姿を傍で拝見しておりますと、ほとんどの人に、まずあたたかく抱きかかえるような態度を取られますね。不満を反省せよ、などとおっしゃらない。

先生 はじめからそれを言うてはいけない。押し付けになる。押さえつけることになってしまう。まずこちらから感謝の言葉を差し上げる。感謝の心が足りないから不満が出てきているでしょ。それですから感謝の心を足してあげるのが理でしょ。

こちらに感謝の心なしで、お前感謝せいと言ったって、相手が感謝できるわけがな

い。そう初めから叱ったらよけい不満の種になり、逆になってしまふ。ですから足りないものを差し上げるのです。高い心の人だったら、こちらが低い気持ちになって接する。冷たい心の人だったらあたたかい言葉、という風にね。

1 1 言わないんじゃないんだ、言えないんだ

Tさんは、「ハイ」と素直に返事をする事ができませんでした。ある時、菊の夫人から、「Tさんは、ハイと言わないね」と注意されました。するとそばにいた先生が、「Tさんは、ハイと言わないんじゃないんだよ。言えないんだよ。子供のときに、親の愛情が薄かったからね。ない袖は振れないというだろ。」とおっしゃいました。Tさんはそれを聞いて、気持ちが楽になると同時に、だから先生は私に親のようによくしてくださるんだと納得したのでした。

1 2 「他自」ともに

「自他共に」とは普通一般に用いられる言葉である。本会では「他自共に」と唱えている。

人を立ててわが身が立つのである。人を助けてわが身も救われる。もらったら働く、こうしてくれればやるというのではなくして、先に差し上げる、出す、それからもらうのであります。「出せば入る」のです。「出し入れ」とは言うが、「入れ出し」とは言いません。

自分が橋になって人を渡してあげる心こそ、「他自共に」の精神である。

商売も、相手をつぶして自分だけが栄えるのは真の商売ではない。また正利ではない。相手を喜ばせ、自分も利益を得て喜べるようであればならない。

13 喜びを人に与える人たちはいずれの世にか幸になるなり

14 お互いに我さえよくばよきことと思う心が病めてくるなり

15 あちら立てればこちらが立たず

あちらを立てればこちらが立たず、こちらを立てればあちらが立たず、両方立てたら身が持たないという。しかし、両方立てて自分も立てていただけの道がある。これを誠の道という。

16 八方ふさがっていても天はあいている

17 「そのお茶は人様に差し上げてください」

私の行動を見て、とても敏捷だと人は言う。二十余貫もあるのに、人並みはずれてすばやいというのは、こうしようと思うと、スッスサッサと行い、そこにためらいやまどいがないからであろう。行動の上に停滞がないからであろう。これは体重には無関係である。

「まあ、そんなにお急ぎにならないで、お茶の一杯でも飲んでいってください」などとすめられると、次に予定があっても、つい座り込む人が多い。断るのは悪いでしょうと言うが、断らなくても言いようがある。私なら、「ありがとうございます。それは人様に差し上げてください」と言っつて、立ち上がる。

お茶一杯の義理づき合いのために十分遅れ、次の訪問先で大事な人と会えなくなることもあろう。それが原因となつて、すべての事の運びがそれからそれへと遅れて、不測の損をこうむることになる。

地球は一瞬の休止もなく回転し続けており、したがつて時間もまた刻々に流れている。これは終始一貫の活動である。天地自然の運行はすべて「待ったなし」である。これが自然の法則である。私の行動は敏捷というのではない。ただ、自然の法則に沿うて停滯がないまでである。

18 人と人とが和合するには

人と人との和がいかに大切であるかについては論を待たない。ではいかにして和を作るか。その根本は、人が人に和するというこの前にあるべき神慮への合一であり、誠への一心である。

人と和そうと思う限りにおいては、あの人はどう、この人はどうというような情にとられる。情を無視してこの世はありえないが、情にとらわれていては肝腎の協力があらずがない。

人のためにやる、自分のためにやるということを超越して、神慮に合一したからこそ私は、どんな苦しい道であつても乗り越えたい、また誰をも恨まず、誰からも恨まれない今日までの生成発展の歩みがあつたのである。

和を作ることも同じである。人が人に和するというような狭い心でなく、神慮を通じて合一していけるような心構えを持っていただきたいと思えます。

いつもお話ししているように、手の指も、親指の腹とはどの指の腹も合うが、他の指の腹同士は合いません。そのように人と人とは合わなくても、一人一人が神慮に合一す

ることによって和が生み出されるのです。

19 手を机にピッタリつければ影は出ない

机の上に手の影が映るのは手が机から離れているからである。影に、迷ったり動揺したりしてはならない。手を机にピッタリとつけてしまえば影は消えてしまう。影を消そうと思わず、影と争わず、影に心乱すことなく、手を机と一つにすることを勉強してほしい。

かまぼこは板にピッタリとくつついている。紙は糊ですき間なく張られる。われわれは天地自然の理法という「法（のり）」を糊として、神にぴったりと心をつけて、すき間をつくらなければ、迷いも動揺も生じない。雑音を耳にしたり、いやなさまを見せられて、腹を立てたり、不平不満を持ったりするのには、心が神にピッタリとついていないからである。

20 家業に励むこと

ある商店の若主人に会ったとき、「世のため人のためにお役に立ちたいと思います。今も社会的にいろいろな用事を与えられていますが、一つの身体では思うようにはまいりません。どのように勤めたら世のため人のためになるのでしょうか」とたずねられた。その人は、町の自治関係や学校関係など十指に余る公職を持っていた。

私はこう答えた。

— 家業にはげむことです。お宅は日々の生活に欠かせない食糧を作っているのですから、その仕事に努力して立派な食糧を作るのが世のため人のためになる誠のわざです。その他のことはすべて雑用、万事やりくりでよろしい。

21 「にんべん」に「為」と書けば「偽」（いつわり）となる。

「人の為に」というが、「にんべん」に「為」と書けば「偽」（いつわり）となる。

「人の為」と言う心の奥に我執貪欲がないかどうか。我執貪欲をはなれてする行いが尊

いのである。

22 「為にする」のではなく、「させていただく」

皆様は一生懸命に生活していますが、ある人は食べる為だと思って努力しています。また子供の為とか事業発展の為とか考えています。だが、何のために努力したらよいかという勉強ができていきますと、こんな目標ではだんだん物足りなくなってくるし、また目標を立てた心に我と欲があったことに気がつきます。我や欲が悪いというわけではありません。「欲」と「良く」とは紙一重であります。目標を發展させよということなのです。發展してまいりますと自分の会社の為と、社会為とが二つで一つだとわかってき、そういう努力ができるようになります。

「為」の勉強をもっと進めて参りますと、「為にする」のでなくて、「させていただく」のだと悟れます。

23 いつまでも物や名誉にとらわれず誠のわざに励みませ

24 真心でなしたるわざはいつの世か照り輝いて栄えゆくなり

25 難しいことを、何心なくやさしく行う、これが誠である。

26 人種、国籍、信教を超えて

(先生は晩年の昭和52年(1977)に、平和運動の拠点たるべきところとして、富士山を駿河湾越しに望む西伊豆の山中に悠久世界平和郷を建立されました。ここはまた神里とも称されました。竣工式において発表された「誠文」に次の一節があります。)

この神里は、ひとり修養団捧誠会のものではなく、人種、国籍、信教を超えて世界の人々が、富士山を対象に大極と魂の交流をする場にあります。世界の人々が神の子とし

て心の扉をおし開き、睦み合い、一人一人が悠久の魂に、悠久のいのちに、ゆるぎなき
平和建設を誓ってゆく、その場であります。

27 世界平和はわが言語動作にある

私は悠久なる世界平和を唱えているが、世界の平和はわが心にある、わが言語動作に
ある。平和、平和と言うのみ（湯呑み）では茶飲み話と言つてよい。一人一人が人格完
成に向かつて実行していくことが大切である。

28 平和の礎は一人一人の心の中に刻み込むもの

世界平和というさまじいことに広いことのようにあるが、平和の礎は一人一人の心の中に
刻み込むものである。一人の人の心の中に平和が建設されれば、やがて十人の人の心
中にも平和建設がなされてくる。

四、つきたての餅のような心

相手が、私を責めるような言葉を投げかけてきた時、そうと気づかないふりをして、穏やかに対応することは、私の自由だ。もしかしたら私の誤解かも知れないし。(編者つぶやき)

1 ころころ変わるは心です

※もしもしカメよの曲で歌えます

(1) ころころ 変わるは 心です

心の くもりの おそろしや

ひがみに ねたみに うらみの心

これが 心の あかとなる

(2) さびしい心は 行き詰まる

すれ合う心は 熱となる
ふんがい 疑い 害となる
よごれた心に 虫がつく
高い心は 落ちぶれる

くよくよ 思いわずらうは

尊い心の 無駄づかい

これが 心の貧乏人

(4) 低い心の 尊さは

愛と 元気と 知恵である

無限の力 現われて

すべてのものを いかします

(5) 自分の心の 持ち方は

相手の心に すぐうつる

合わせ鏡と 反省し

感謝の心で 実行に

(6) いくら立派な 種じゃとて

石の上には 育たない

がんこな心を やわらげて

誠で 素直に 切りかえよ

2 つきたての餅のような心

包丁には包丁の持ちようがある。正しく持つてはじめて用を足すことができる。心にも持ちようがある。「心持ち」というが、心をいつもつきたての餅のように持つのが正しい心の持ち方である。

つきたての餅のような心とは、あたたかく、やわらかく、粘り強く、大きな包容力のある心です。

ところがその心が、日がたつた餅のようにコチコチに固くなる。こうなると全く融通性がなくなつて、心の働きがなくなつてしまう。固くなるばかりではない。そのうちにひび割れがし、青カビ、赤カビまで生えてくる。持ちも下げもならぬ心の姿とはこういう心をいう。

3 “さかしま心”を持つか持たぬかが幸と不幸の分岐点

人には、生活のための食欲と我執がありますので、それが、ねたみ、うらみ、ひがみなどになつてくるのであつて、これを“さかしま心”というのであります。

“さかしま心”を少しでも浄化して、喜びに切り替えていきまさんと、なしたる業が“くいちがい”になつてまいります。希望がはずれた、願いがかなわない、と申しますが、それはここからくるのであります。

“さかしま心”をもつて、物事を考えていきますと、そもそも判断が狂つていきますから、行なつても行き詰る。事は成就しません。よく「勞して効無し」と申します。一

生懸命に働いても、その効果があがりません。すなわち花も咲かず、実りもありません。これは“不徳”であります。

不徳の種は自分一代だけのものではありません。先祖代々から、“さかしま心”を使って不徳の種を蒔いている。自分もまた知らず知らずに、どれほど蒔いているか知れない。その原因を、結果として身に知らされ、環境に教えられる。

“さかしま心”を持つかもたぬか、解消するための努力をするかしないか―ここに人生の幸と不幸の分岐点があるとも申せます。身の患いも、心の患いも、事業の患いも、すべての不幸は、“さかしま心”の種が蒔かれてあつたがゆえであり、この種が芽生えてきて“身しらせ”となって現れていることを自覚しなければなりません。ここをよく勉強して悟り、改めていかなければなりません。

4 心が変われば環境が変わります。

5 心の点検をなまけていては危ない。

自動車を運転する人は朝夕にエンジンに点検する。点検を怠らないから故障もおこらない。肉体を動かすのは、わが心である。心の点検をなまけていては危ない。

わが心に怒り、ねたみ、うらみ、しつとがあるかないか、よくよく点検してほしい。点検もせず、整備もしないから言葉の交流を誤り、金や物の交流に、取り違いをすることになる。

6 カメラのレンズが曇っていれば正しい映像を結ばない

カメラのレンズが曇っておれば正しい映像をむすばない。同じように心が濁って曇っておれば、見たり聞いたりすべてのが思い違い、取り違いとなって、おのずから迷いの渦中に入っていくことになる。「心を浄化なさい」「魂をみがきなさい」と、口をすっぱくして教えているのはこの故である。

7 不平を思わず、不満を言わず。

8 不平を持たず、持たさず。

9 猫でさえも白いご飯を食べているのに…

私とて肉体を拝借して生きている人間である。時には寂しい心を持ったこともある。来る日も来る日も粉末と野菜くずの雑炊をすすったり、パンの切れ端をかじったりしているとき、たまたま飼い猫が白いご飯に鰹節をふりかけてもらって食べているのを見て、猫でさえも白いご飯を食べているのに…と思わず涙をこぼしたこともある。それでも人を恨めしく思ったり、妬^{ねた}んだりすることはなかった。どこまでも人の幸福を喜び、祝福してあげてきた。

10 うちのねえやは正直者で本当のことを言うなあ…

ある時、宅のねえやに「すまないが水を持ってきてくれないかね」と頼んだ。すると彼女は、「先生はコタツに入って新聞を見ていてヒマでしょう。自分で飲みに来たらいだらう…」と言った。私はいつも皆さんに、いついかなる時でも不平不満を持つなと教えているが、その時はちよつと不満が起こった。しかしそれはとっさのことで、すぐ心は鎮まり「うちのねえやは正直者で本当のことを言うなあ…」と思った。それで台所へ立っていこうとすると、「持っていつてやるよ」と言つて、いい顔を見せながら持ってきてくれた。

11 あの人の足はマメに動いているなあ

ある会員が、「不平不満を持つなと言われますが、怠けている人を見ると、よい気持ちではありません。小言の一つも言いたくありません。どうすればよいでしょうか」と言ってきました。

——あの人は怠けている、けしからんと侮るようでは真心とは言えない。そういう時

はこう思うのですよ。忙しい最中にマゴマゴしている人があれば、「あの人の足はマメに動いているなあ」、あちこちキョロキョロしている人を見れば、「あの人の目はよく動いているなあ。」どうです、こう思いながら、教え導いていけば不平不満はないでしょう。

12 すべて「ええよう（良いよう）」に受け取る

見ること聞くことを、すべて「ええよう（良いよう）」に受け取っていく。これが、まごころである。

「良いよう（ええよう）」に受け取っていくから、魂の「えいよう（栄養）」になる。さかしま心で受け取っていくと、魂を傷つけ汚し、すこしも栄養にならない。

13 水のような心になるように

濁った泥水でも、砂を（素直）通ると、きれいに澄んだ水になる。人の心も、低い心

で物事を素直に受け入れると、きれいな明るい気持ちになる。

水のように、素直で低きにつき、しかし切っても切れず、石をうがつ強さを内に持つように修養せよ。低い心は大地の心、地から力が生じる。

14 人から言われたことが気になるのは

人から言われたことが気になるのは頭が高いのである。低い心でいれば、「そうですか、有り難うございます」と、心から感謝で受けられるのである。

15 高い心は不安定

高い心は一番不安定である。どんと落とされれば立ち上がれない。

16 神への降伏が人間の幸福

人間はいろいろの心を使うが、その中でも一番恐ろしいのは、ねたみ、そねみ、うら

みである。この心を使うと、そういう思いをしたというだけではすまない。必ず利子がついて返ってくる。だから恐ろしいのである。

私はむかし、質屋に行つて金をつくり、それで土産物をととのえてある先輩を訪ねた。ところが相手はけんもほろろの態度で悪声をあびせかけて、せっかくのお土産を土間にたたきつけた。それでも私は腹も立たなかつた。残念にも思わなかつた。この悪声こそ私の魂を太らせる肥（声）であると感謝し、捨てられた土産物を押し頂いて帰つてきた。嘲笑されたり、ののしられたり、少しでも侮辱にあうと、人はなかなかその屈辱に耐えられない。そこに「うらみ」の心がわく。恨んだからとて幸福が来るものではない。

私は人間に降伏したのではない。そのような目にあわせてくださる神に降伏したのである。仕方なしの降伏ではない。感謝を添えての無条件降伏である。降伏は幸福である。神への降伏が人間の幸福であることを忘れてはならない。

17 心で心を見直す

今日の自分の行動が良かったか悪かったかは、教えをいくら調べても書いてありません。やはり教えて養った自分の心で、自分の責任において判断しなければなりません。朝新しい心で一日を始めても、我執貪欲はいつのまにか心の底に入り込んできます。心で心を見直す、見直す心もまた心で見直す。人の道はこうして努力して判断していく以外にないのであります。またそれでいいのです。それでいいという根拠は、その心がいのちの親から頂戴した心だからであります。

18 見たい見たいと思うなら、おのが心の中を見よ

神のみたまはどこにある 目には見えねどあるぞかし

見たい見たいと思うなら おのが心の中を見よ

魂を磨きて悟るなら 神のみたまは清らかに

光り輝き目に映る ここに尊き神ぞある

五、松の木は曲がったままで真つすぐだ

避難マニユアルや礼儀作法にしても、状況によって何が正しいかは異なつてこよう。大事なことは、それを正しいとした、判断の基準が何かということだろう。（編者つぶやき）

1 「砂糖は辛いね」

就職する前の大学4年の夏、たまたま先生のお宅に伺つたことがありました。先生は二人の婦人会員に囲まれて、当時大好物でいらした砂糖水を少しずつ飲みながら話をしていたらしゃいました。

突然、「皆さん砂糖をあげましょう、手を出しなさい」と言われ、一人一人の手のひらにスプーン一杯の砂糖をくださいました。私も頂きました。先生は、「どうぞなめなさい」とおっしゃつたので、皆なめました。そうしたら先生はニコニコ顔で、「どうぞ皆さん、砂糖は辛いね」という言葉を出しました。そして一人一人に「砂糖は辛い

ね」と尋ねられました。聞かれたご婦人たちは一様に、「アーラ先生、オホホホホ…」と答えました。私の番になりました。「茂さん、砂糖は辛いね」とお聞きになりましたので、私は「いいえ先生、甘いです」と答えました。

先生は少しも動じず、「じゃあもう一杯」とおっしゃって、皆さんにもう一杯くださいました。なめて、「辛いね」「オホホホホ」が繰り返され、私は、「いいえ甘いです」と繰り返しました。この同じ動作と言葉がもう一回繰り返されました。三回目が終わると先生は、スーツと席を立たれて、奥のお部屋に入って行かれました。

翌年の春、私は製鉄会社に入社し、工場実習が始まりました。灼熱の鉄と炎の近くでの仕事は脱水するほどの汗をかきました。そうすると水を飲むのですが、その前に、そこに置いてある塩の塊を指の先で削り取って口に入れるのです。すると、汗をかきかけた体に、この塩はまさしく甘いのです。

もう一口、まだ甘い、もう一口と口に入れていくうちに、もう辛くて口に入れられなくなってきました。そうしたら心ゆくまで水を飲むのです。

塩が甘いーと感じた途端、「砂糖は辛いね」の先生の言葉が、先生のお宅のあの情景が頭に蘇りました。そして砂糖は甘いと最後まで言い張った自分自身の姿も。

心の中からじわつと喜びが湧き上がってくる思いがしました。そうだ、砂糖は甘い、辛いのは塩というのは僕の狭いとらわれだったのだ、現に今ここで舐めた塩は甘いじゃないか。先生これですね、こういうことに気づいたことは嬉しいことでした。

2 複線になりなさい

自分では我を通しているということとはわからないでしょうが、あなたは一本調子の人だから、これは正しい、こうしようと思ったことは譲らず、人の言うことを聞き入れず、どこまでもそれをやり通すので、人と突き当たることが多い。一直線の道はないだろう？ 曲がる場所も曲がらず、真つすぐに行けば落っこちる、これは誰も分かることです。これからは複線になるお稽古をしないさい。複線になれば、ああ来たなあと思った時は、ちよつとよけてその人を通してあげられるようになる。それからまた自分の道を

行けばよい。これが負けて勝つということ。どこまでも自分が正しいというのは相手を苦しめることになるからね。自分のやっていることは正しいと思っただけでしょうが、それは常識で考えれば正しい。しかし神の道での正しいということは、丸い心になることです。この心でいけばどこまで行っても突き当たることもなく、人様にいやな思いをさせることもなく、自分も気持ちよく過ごすことができるのです。

3 「思い」を放してみる

「いったんこうと思いつくと、なかなか放さない。おれの思いは正しいと思いついてる。そうして無駄な苦勞をしているのである。「思い」を放してみる。箸を持ったままでは、何一つできない。箸を持ったり放したり、それによって食事もできる、手紙も書ける、仕事もできる。」

4 茶ビンのつるは曲がっていても正しくついている

正しいとは真っすぐなばかりでなく、茶ビンのつるのように、曲がっていても正しく
ついているものもある。

5 松の木は曲がったままで真っすぐだ

曲がった松の木は曲がったままで真っすぐである。なぜなら曲がったままでそれは自然の姿であり、自然のままの生活を素直に表しているのである。ありのままの姿、ありのままの気持ち、それでよい。

6 世の中には、あの方（型）、この方（型）、いろんな方（型）がいる。

7 ここに金遣いの荒い人がある

ここに金遣いの荒い人がある。すると人間相互にあつては常識的な、感情的な判断に基づいて、この人が誤っている、この人は悪いんだと決めてしまう。こうして根本的な

誤りを犯すことになる。人の世の法律は現実の行いによってその善悪を判断して裁いていく。神の法にあつては、現実だけを判定の尺度にしない。過去の種、その人の魂をめぐる縁など、まことに複雑な要因が判定の尺度になる。この大切な根本を棚上げしておいて、簡単に人間感情で決めてしまうから間違いを生むことになる。

8 その人の心の幅、奥行きによって、ものの見方が違ってくる

見ること、聞くことに己の意を用いておりますと、正しい判断ではあつても、範囲が狭く、奥行きが浅くなるのであります。その人の心の幅により、奥行きの高さによって、ものの見方や考え方が違ってまいります。

9 人を、おかしく、狂っていると思うのは

人がおかしく、狂っていて、自分は狂っていない、正しいと信じている人がほとんどである。

果たして自分は絶対に正しいのであろうか。正しいと信じているだけで、正しいと断定する根拠は何もない。すべては天示の範例であるから、素直に次のことを反省していかねばならぬ。

― 思い違いをしていないか。

― 勘違い、取り違いをしていないか。

― 間違いをしていないか。

こう点検していくと、絶対にならないと言い切れない。むしろ聞き違い、思い違い、取り違い、勘違いばかりである。とすれば、自分がおかしい、狂っているから、そういう人が目の前に現われてくるのだと得心できる。

10 人を見てとやかく批判している間は

あの人は、この人はと、人を見てとやかく批判している間は、自分のなすべき実行が遅れて、知らず知らずのうちに不徳を積むことになる。

11 人を見てどうやこうやと語るよりおのが務めに努力ましませ

六、二つで一つの理

世の中には、いろいろなものや様々なことが存在している。実に多種多様だ。それらの存在の仕方にはどんな原理があるのだろう。（編者つぶやき）

1 「なぜこの人は言うことを聞かないのだろう」

子どもに教えてあげる母親に、嫉妬心がある、怒りがある、子どもの行いに不満がある。そういう心で子どもに言葉を差しあげても、あげた言葉がムダになります。これを「言うことを聞かない」という。

私たちは毎日のように経験しております。「なぜこの人は言うことを聞かないのだろ

う」「なぜわからないのだろう」と。

それは、自分自身に、聞かないところがあるからであります。自分自身に知識の足りないところ、徳の足りないところ、不平不満の浄化できないところがある。それを教えてくださっていることに気がつかない。

2 映像のフィルムはこちらにある

子供が口答えをする、その映像のフィルムはこちらにあるのです、こちらにあるものが、映像として向こうに映っているのです。

3 自己の足りないところを、他人が見せてくれる

われのみが正しいと信じ、他人の行動は悪いと責める前に、他人も正しきことあり、また徳も備えていることを思わなければなりません。

他人の欠点がかかる間は、その欠点はわれにもあると心得ねばならないのであり

ます。自己の足りないところを、他人が足りないこととして見せてくださいます。自分の不徳や足りないところを、他人が言葉や動作で見せて教えてくださいます。それによって一層修養することが肝要であります。

4 合わせ鏡

鏡（カガミ）の中の「ガ」（我）を取ると「カミ」（神）だろ？ 我を取って神のみ心のような清浄無垢の心になることです。相手の欠点はすぐ気が付くが、自分の我には気がつかない。そこで、「世の中は合わせ鏡でわがことを人が真似して教え示せり」と教えてあるでしょう？ 相手の言語動作をあれこれと批判しないで、合わせ鏡として自分の心を見る稽古をしてください。

5 見せられるのは、見せていただいている

辛い、苦しい、耐え難いことを、なぜ見せられるのか、聞かされるのか——それは見

せていただくのであり、聞かせていただくのであって、そこに深い神の思し召しがあると悟るとき、私は神慮と合一し、神と合掌の姿になっておりますから、そこには不滅の徳と力と愛とが宿されます。

6 「二つで一つ」の理

人は空気の中に生かされている。空気を呼吸して生きている。空気と命とは別々のものではない。二つで一つである。水と魚、土と野菜——万物の命は全て二つが一つとなって現れている。これが天地自然の法則である。恩人と仇とは裏と表である。二つであって一つである。難が有って有難い、これもまた表裏の関係にある。二つで一つである。

7 見事に差し上げて、上手にいただく

息は吐く息と吸う息と二つで一つである。この理が我々の生活の中にも常にいかさねなければ、行き詰まり（息詰まり）となる。

人様に差し上げるのは好きだがいただくのはきらいだ、話しをするのは得意だが聞くのはにがてだ、世話をするのはいいがされるのはいやだーというのでは、吐く息ばかり、あるいは吸う息ばかりであって、これでは必ず行き詰る。見事に差し上げて、そうして上手にいただく。これが正しい交流である。

8 一方だけにとらわれない、「二つ・一つ」の世界観

この世はすべて「二つであって一つ」である。この“二つ一つ”の世界観を持ってもらいたい。人々はとかく一つー一方だけにとらわれて判断し、もう一つを忘れ、置き去りにしている。そこに破綻があり、不幸がある。

9 人の道と神の道

人の道は交換条件であって、百円玉を持っていくと百円の物がいただける。金と物と交換条件だ。また「これは三百円だ」「高いじゃないか、買わない」ーこれでもいい。

敵に対して敵でいくのは、これは交換条件だ。一步進んで無条件は神の道。敵にも、腹がへつたらおむすびを差し上げる、世話にならなくとも世話をしてあげる、これが神の道。

好きだきらいだ、もらったもらわない、時間ががない、金がない、立場が違うと、感情づき、理屈づきの人の道は交換条件。神の道は無条件。そういう点において判断を誤らないようにしていただきたい。この二つを混戦してしまつてはいけない。この境を誤つてはいけない。

それですから、交換条件で行うことと無条件で行うこととの両道を、皆さんに教えているのであります。

10 生死は一如である

生死は一如である。生まれるから死ぬ。死ぬからまた生まれる。これは「いのち」の回転である。永遠に切れ目のない大きな円（縁）である。

肉体は代わるが靈魂は不滅である。

11 「魂の存在」に開眼

大正_二年（1923）9月1日（土曜）、その日は台風の影響で小雨があった。やむとカンカン照りとなり、湿気が残って蒸し暑い日であった。午前中に二、三人の来訪者があった、その人たちの人事相談に応じていた。

「先生、もうドン（正午の号砲）が鳴る時間ですわね」

「もうそんな時刻かね」

最後のお客を送って、タバコを一服つけ、それを半分ほど吸ったかどうかであったか、はるかに唸り声のような地響きが聞こえ、何だろうと思う間もなく、グラグラと揺れが来た。後日の発表によると、9月1日午前二時₅分₃₀秒であったという。この一瞬に東京横浜をはじめ湘南一体が壊滅し、その上至る所から火災が起こって丸三日間、東京は焦熱地獄と化した。

私は在郷軍人として、焼死人の始末をする仕事に回された。東京の死者は十万人と言われたが、そのうち八割までが焼死者であったから、市中至る所にその死体が転がっている有様であった。真っ黒に焼けただれて老弱男女の区別もつきかねる死体をまるでゴボウのようにトラックに積み上げて焼き場に運んだ。

ある日、駒形橋の近くで隅田川に浮かんでいる死体を引き上げていると、二体が一つになっているのがあった。よく見ると母親とその幼児らしい。そのままでは何とも残酷すぎるので、引き離そうとしたがどうしても離れない。諦めてそのまま車に積もうとしているところへ、十一、二歳くらいの女の子がフラフラとやってきて、その死体を見つけると、「お母さん」と泣き叫んでしがみついた。

やがて女の子は泣く泣くその場を立ち去った。その後でもう一度母親と幼児を引き離そうと思って手をかけると、なんとという不思議であろう。こともなく二体になったのである。この現実にあつて、人間には「魂」があることをはつきりと悟れた。それまでの私は、人々の人事相談にあずかっていたが、靈魂説だけは信じられず、ほとんど無関心

であつた。しかしこの刹那に「魂の存在」に開眼し、この開眼の縁を与えたもうた神の働きを悟れたのである。人々を悲惨から救い上げ、明るい平和世界を建設したいと念願し、修行を志して東海道の旅に出たのはそれからである。

七、ナスの種を蒔いて、ウリはならない

世の中、一瞬の滞りもなく動いている。そして喜怒哀楽、毀誉褒貶の人生絵巻が展開している。その動きにはどんな秩序があるのだろうか。

(編者つぶやき)

1 胸三寸に整然たる宇宙の秩序が

果てしない大きな暗黒であつた。灯火一つまたたかぬ大宇宙の闇の中に、日月星辰

がかかっていた。地球もその中であつたに相違ないが、私には、動き回る無数の球形のどれが地球であるのか見分け難かつた。ただ、その美しい運動に魂を奪われて見とれるばかりであつた。それぞれはそれぞれのコースを、あたかもレールの上を走る列車のよう駆け回っていた。それが非常なスピードである。私には一つの光の線にしか見えな。見え切れない光の線が、暗黒を背景にほとんど円を描いている。見とれるばかりの壮観であつた。

ふと心に描いた大宇宙の縮図である。私の胸三寸、それは無形の存在である。質もな量もなく、従つて大きさもない。五尺の肉体のその中にあるとすれば、それほど大きなものとは言い難い。しかし、その胸三寸に宇宙の大きがすつぽりと入つてしまうのである。魂は神の分けみ魂であるということがよくうなずけた。

宇宙の縮図は、しばし私の心の中の映像として残つた。目をつむれば、その映像がすぐ目の前に鮮明に浮かび上がった

日月星辰は、その軌道を変えない。目に見えないレールの上を無限目指して走り続け

る。宇宙の秩序は、見えざる軌道によって整然と保たれ、そこにまた“平和”のあり方が示されているのではないか。

昭和二年元旦の払暁のことであつた。私は二階の神前に端座して、想念にふけていた。この時であつた。わが心の中のその中の、その奥底に神の鎮座を拝し奉つた。

「神います高天原はここだよ」——ここだよと言って、私はよく腹をたたいてみせたものであつたが、“神の鎮座”をはつきりと自覚したのはこの時であつたといえる。

2 すべて心通りに現われる

（先生は大正九年（1920）、徴兵され、宇都宮で入隊。大正二年の末除隊し、栃木県佐野市の実家に帰郷。翌大正二年春、再度上京し、寺島方面に下宿。人々の救済活動を再開されました。）

会員（当時は神理研究会）の一人に塚田という人がいた。その服装にも風貌にも貧しさがあふれているような人であつた。二月に入った寒いある日、うちしおれてやって

来た。五つになる長女と、三つの次女とが病気で寝ているのでお助けいただきたいと、わざわざ私を迎えに来たのである。

住居は三河島の通称「ハーモニカ長屋」と呼ばれるところであった。部屋は四畳半一間きりで、親子五人の暮らし。その中で二人が熱を出して寝ているのだから座る場所もないありさまだった。これでは心も荒れずさぶであろう、言葉遣いも切り口上が多いであろうーと思った。

神理研究会綱領四（「天恩を自覚して、父母の慈愛に報い、隣人を愛し、物心の無駄遣いのないように心掛けること」）に基づいて夫婦に話しをした。8時ごろから始まった話であったが、気がつくると二時近くになっていた。帰ろうとすると、夫婦が口をそろえて、「出居さん、今から寺島までは大変だ。きたなくて狭いが泊っていきつてくれ」と言つて、しきりに引き留めた。

その心は美しかった。常識ではとても泊つていきつてくれとは言えないであろうに、夫婦はなりふりかまわずに、あふれるような親切から言うのであった。それを振り切つて、

「いや、今夜は約束があつて、家に人が待っているから…」と言つて表に出た。口ではきれいなことを言つておつたが、心の中では、四畳半で六人がどうやって寝るのだろうか。寺島へ帰れば広い部屋もあるし、悪臭もない—と思つていた。

4時間ほどその家において最もつらかつたのは、名状しがたい悪臭であつた。外に出て夜更けの空気にふれると生き返つた思いがした。すでに二時を過ぎており、その時刻に電車はなかつた。歩いて白髭橋まで来てから、懐中無一文になつているのに気付いた。

—そうだ、あの家に全部差し上げてきた。

袂をはたいてお金の細君のやせた手に握らせ、「明日米でも買つて子どもたちに食べさせてあげなさい」と言うと、夫婦は涙をこぼして感謝しておつた。それで私は無一文になつたのである。

その頃は、白髭橋には橋守りがおつて、1銭の渡り料とつていた。それをうっかり忘れておつた。

「爺さん、今日は財布を忘れてきた。すみませんが通してくれませんか。毎日ここを

通っている者です。明日必ず持つてきます。」

爺さんは私の言葉を信用しそうになかった。

—
そう言われると腹が立った。

「なんだ、このおやじ、俺はいいことをしてきたんだ。それに文句をつけるのか。」

「この野郎、いい加減なことを言つてごまかすな。金がなければ向こうを回つてい
け。」

あまりの暴言に、殴つてやろうかと思つた。その腹の虫をようやくおさえて、浅草から吾妻橋回りにした。距離はうんとのびた。おそらく「時を過ぎていたであろう。吾妻橋を渡るとすぐに交番があり、その前を通りかかると、若い巡査に呼び止められた。

「オイ、オイ……」

さつきの腹立ちがまだ静まつていなかったので、「甥じゃない、他人だ」と言った。

今度は巡査が怒つた。派出所に入れられてさんざんしぼられた上、挙動不審、名誉毀損

ということでも向島署に留置された。

留置所には四、五人ほどの先着者がいた。その中の年長者らしいのが、「おい若い、お前は何をしてここへ来たんだ」と言う。

「何もしていません。巡査の勘違いです。」

「まあ、ここへ入ればまず監房長官にあいさつしろ。」
と言った。

「その人どこにいるのですか。」

「この人だよ、この人が監房長官だよ。」

と言って、そこで上座と思える場所に寝そべっている男を指し示した。

「この人寝てるじゃありませんか。寝てる人にそんな必要はありません」。
と言うと、

「新入りのくせに生意気なやつだ。」

と言うより早く、その男からボカボカと殴られた。

その一夜、私は入口に近い隅っこで小さくなって過ごしたが、心を鎮め、冷静になってみると、その夜、私の身の上に現われたことはすべて心通りであることに気が付いた。その一は、三河島で「こんな豚小屋で泊まれるものか」と思い、夫婦の好意を断った。だから、心通りに「豚小屋」で泊まることになった。

その二は、橋守りの爺さんを殴ってやろうと思った。そう思った心の通り、豚小屋で散々に殴られた。

その三は、お金を恵み与えて、自分は善いことをしてきたという自信過剰のゆえに、誰に対しても威張り高ぶった気持ちと言葉を使った。その結果、威張った巡査と「監房長官」に屈服させられた。

すべて心通りに現われる――すべての訳がわかれば、三河島より悪臭のただよう、そして堅い板の間の四畳半も、意外に楽しいところでもあった。

3 なっててくることを感謝して受け取りなさい

「どうしたらよいでしょう」と相談する人があったので、「なってくることを感謝して受け取りなさい」というと、「それでは身が亡びてしまいます。なってくることを、どうすれば回避できるか、その相談にきているのです」という。

柿の実がなった、みかんがなったという。その「なった」という意味は、種がまかれて芽生え、成長し、花が咲いて実ったことをいう。病気になった、貧乏になった、困ったことになった―人生において「なってくる」ことも、すべて種がある。それが時期を得て「なってきた」のである。この道筋を悟れば、喜んで、勇んで、刈り取っていく勇氣がわいてくるはずである。

4 花を見て喜ぶ人は数あれど花を咲かせたもとを知らねば

5 ナスの種を蒔いて、ウリはならない

すべて結果には原因がある。草花も種を蒔かなくては生えてこない、咲きもしない。

ナスの種を蒔いて、ウリはならない。

種を蒔いてあつても、時期が来なければ芽も出ないし、花も咲かない。人の悩み苦しみにも解決する時期がある。辛抱しなさいというのはそこである。辛抱せず、不平不満ばかりに明け暮れておつては時期が来ても解決できない。喜びの実りを見られない。誠を捧げての終始一貫、そこに花咲き実る天の与えがある。

6 無意識に蒔いた種もいづれ芽ばえる

人は果物をいただく、その肉だけを食べて種を無意識に捨てております。土の上に吐き捨てられた種には、これが芽生えてまた実るのであるという人の意識は添うておりません。たとえ人が無造作に、無計画に捨てた種であつても、種そのものにはいづれ芽ばえるという必然の道があります。

人の世には、こういう種がどれほどあるか知れません。人はそのほとんどを忘れ去っておりますが、その口から吐き捨てたのは事実です。その手足をもって投げ捨てたのは

事実です。その事実が現実となつて芽生えてくる。これは当然であります。天地の理は、生成発展やむことのないのでありますから、そこには寸分のうそもありません。

このように、「種」を悟る、種を芽ばえさせた天地自然の誠を知る――これが神慮を悟ることであり、悟れば――「ああそうか、こういう種も蒔いてあったのだ。よし刈り取ろう」という素直な心になれるのであつて、これが「神慮に合一」であります。

7 お互いに今さえよくばよきことと思ふ心は幸にならざる

8 一つの行いをして、それが行方知れずになることはない

太陽は東から出て西に没する。没してもまた必ず東から出てくる。これは地球が回転しているからであり、天地自然の秩序正しい法則である。われわれの行いにしても、行ったことは必ずかえつてくるという真理を示している。善行も悪行も、必ずかえつてくる。一つの行いをして、それがそのまま結末も見せずに行方知れずになってしまうこと

はない。“回転”という理法の中に生かされているのであるから、人はその理法の外で生活は許されないのである。

9 天のテープには一音の漏れ落ちもなく収められている

言葉はその場かぎりで消えていくものと思われている。文字は書き物、印刷物として残るが、言葉はそういう証拠を残さない。そこで人の世に「言った」「言わない」

「聞いた」「聞き違いだ」という争いが起こる。しかし、われわれの言葉は余すところなく天のテープに入っている。精緻をきわめた天のテープには、一音の漏れ落ちもなく、一音の間違いもなく収められている。

どのような誤解や悪口があろうとも、天が知っていると安心立命する。神が知っているくださるから、おまかせすればよい。

10 天のソロバン勘定には寸分の狂いもない

天のソロバン勘定には寸分の狂いもない。誠の務めをしただけが、月々年々にキチンと清算されて環境に現われる。

11 世の中、不公平はない

正直者がバカをみるとか、正直で真面目な人がなぜこんなに苦勞をするのかなどと、よく聞くのであるが、これは徳の分量ということ知らぬがための不平不満で、ついには社会をうらみ、親兄弟をにくむような心にもなりがちである。

人から見ても傲慢無礼で、常識はずれで、不道德な行いをしながら、物も豊かに、健康にも恵まれて生活している人も数多くある。

世の中は矛盾した不公平なものとも考えられるが、徳の分量ということが各人に悟られるならば、何一つ憤慨することもないのである。過去に徳を積み、徳を流したことから、現在の徳の分量があるのだと悟られるならば、なんら矛盾も不公平もないことが分かるのである。人の肉体にしても、身長、体重も違い、顔かたち、みなそれぞれに違

うのである。人を見、物を見て、心が迷い、不平不満、悲哀を感じるようでは、人生を
活をしていてもなんら生きがいはないわけである。

12 事故を起こすような車には乗り合わさない

私は電車と飛行機と自動車に乗りづめで全国を巡っている。地方に行くとき必ず「先生、いつも御無事で…」と挨拶を受ける。中には、「先生が事故に遭われることはないでしょうね」という人もある。そんなとき、「私は事故を起こすような車や飛行機には乗り合いません」と答える。

八、生かされて生きている

ひとは空気や水がなければ生きていけないし、一人でも生きていけない。また人生今までのいろんな岐路があつて、その結果今がある。

それらのことに、自分を包んでくれるあたたかさ、ぬくもりが感じられれば―それが究極の何かだろう。（编者つぶやき）

1 手のひらを通してネズミの感触が伝わってくる

（先生は、⁵⁵歳であった昭和二〇年（1935）の5月、特高警察によつて板橋警察署に連行され、不敬罪の容疑で⁵⁰日間勾留されました。当時先生は東京の下町で、それまで同様悩める人々と交わり、人心の救済にはげんでおりましたが、人々に話しをする中で、軍部の政治介入を批判する発言をすることがあり、それが危険視されたのでした。その後未決として市ヶ谷刑務所に収容されました。）

私は市ヶ谷から法廷通いをして調べられたが、審理は遅々として進まなかった。いつしか夏も過ぎて秋になり、獄舎の夜の冷え込みが身にしみるようになった。

ある日、看守が入口の扉を開けると、どこから迷い込んで来たのか、一匹のネズミが走り込んだ。看守は気がつかなかったらしい。すぐに扉を閉めたので、ネズミは出るこ

とができず、私と二人きりになった。チヨロチヨロ忙しく走ったり、つと止まっては私を凝視したりするネズミは、何一つ動きのない、水底のような寂しい獄舎に無限の生動を示す、尊い存在であることに私は気づいた。

そうすると、神が慰問によこしてくださったのだと思えた。「ネズさん、よく来てくださった、ありがとうよ…」と、ネズミに合掌して、心からお礼が言えた。

翌日から、神のお使いだという心持ちで取り扱い、食事でもお水でも、お初を差し上げた。すると、扉が開けられても外へ出ようとはせず、隅っこに隠れているようになり、
☺ 日目には、私の手のひらの上で遊ぶようになってしまった。このネズミ一匹で、私はどれほど慰められたか知れない。そうしてまた、貴重な悟りの道さえ開いてもらった。

ある夜、いつものように、夕食の後でネズミとたわむれていた。今はもう、人間対動物の境を超えた仲良しであった。手のひらを通してネズミの感触が伝わってくる。手のひらの上で立ったり坐ったりするたびに、その重みが伝わってくる。かわいい足を通じて体温も流れてくる……。その一瞬であった。

—— 万物これ誠なり、

と悟りがひらめいた。

地上の万物は、人も動物も植物も、すべて同じ一つの空気をすいあい、同じ太陽の光と熱とを分け合って生かされている。天地の恩恵に浴して「いのち」を与えられていることにおいて万物これ一である。「いのち」に差別はない。誠をもってすれば誠は必ず通う。それは「いのち」が一つにつながっている故である。

それから間もなく、私の気づかないうちにネズミはどこかへ姿を消した。

2 私 は 天 地 自 然、 万 物 と 融 合 一 体

神とは万物普遍の霊であります。霊は零（0）であり、無始無終の理を示しているのです。起点無く、終点無く、無限の循環であって、生と死とはそれです。生と言います、死と言いますが、本来は生もなく、死もなく、ただ永遠のいのちがあるだけです。

この悟りに立つとき、人は天地自然と、万物と一体になるのであります。人を存在せしめ、万物を存在せしめ、この天地間のありとあらゆるものをかくあらしめている根源と一つになってしまえば、万物と融合一体になれるはずであります。

「万物是誠」と教えておりますが、その真意はここにあります。生死を開悟し、無に至った時、確かに私という人と万物とが並び存しており、天地もまた私という人と共にあるという、常に万物と一つにあるという境地にこの身をおくのであります。

3 人間は生かされて生きている

人間は生かされて生きている。ただ生きているのではない。生かされて生きているのである。ところが人々は自分の才覚で生きなければならんと考えて、生きることだけに夢中になり、生かされていること忘れ果てている。ただ生きよう、生きようとするから天地自然の真理に逆行する。筋道を誤る。筋道を切ってしまう。

4 生まれるも死するもすべて神のわざ人のなすべきことにあらざる

5 生きる道生かされる道両道を学び修めて励みませ

6 山海の珍味を口に入れても

山海の珍味を口に入れても、飲み込む力を失っては胃袋まで到達しない。生かされている姿、私の力でない力が知られる。

7 家のある人もない人も、富のある人もない人も、同じく生かされている。

8 天地自然の「誠」は、万物を生かすこと

天地自然の「誠」は、万物を生かしていくことであり、人はその誠によって生かされているのであります。ですから「生かされている」という自覚を持ったとき、天地自

然の誠と結ばれていくのであります。

引力という天地自然のエネルギーがなければ立つことが許されません。火・水・風という天地自然の徳と力と愛がなければ、万物はこの地上に生きていけません。

生かされている——この根源を自覚すること、これが修養の最も大切な点であります。

9 米や水や空気の味

柿の時節で、今が柿のもっともおいしい時である。柿のうまさ、これは文字に書き表わしようがない。これは天地自然の甘露の味である。

人間のつくる料理には、甘いこともあるし、辛いこともある。砂糖や塩加減が、必ずしも同じようにいかない。天地自然の味にはそれがない。いつ食べてもおいしい。ことに米や水や空気の味になると、七十年食べ続け、飲み続け、吸い続けてもあきることがない。そこには、いのちの親の“まこと”が込められている。

われわれの人生行路には、悲しいことも辛いこともある。しかし、これはすべて、心

の味わい方一つによって決まる。どのようなことも“おいしく”いただけるような心になるよう、われわれは日夜勉強しているのである。

何でも、おいしく喜んでいただけるのが“まこと”であり、そこに“いのち”の養いがある。

10 一人一人に幸せに通じる道筋がある

人には一人一人に生きてゆく道筋があります。それぞれ顔が違うように、道筋も違います。今日悟れなくとも、幸せになれなくとも、皆幸せに通じている道筋には違いありません。

右手のない人は、左手と両足とで歩んでいける道筋です。また歩んでいかねばならぬ道筋です。右手のない人は左手のあることに感謝せよと教えてるのは、右手が欲しいというさびしい思いをまぎらわせるのが主旨ではありません。右手がなくなったら、残っている左手を見つめて、そこにあなたの幸せを望むいのちの親の配慮を見い出して下

さい。その時こそ、生かされていると悟る機会なのであります。

食糧危機で飢えるアフリカの人たちの姿をテレビニュースで見て、彼らに比べて自分はささやかながら夕食をおなかいっぱい食べて、体を休められるのだから恵まれていると思う、これは常識で考える幸せであります。しかしこういう心では、たまたま山海の珍味を楽しむ金持ちをテレビで見ると、すぐ自分ももつと欲しくなってしまう。

今日食べた夕食は、生きるために頂いたのであります。その夕食の中に生かしてくださるいのちの親の恵みがあるのです。目に見えぬ糧があるのです。

11 厳しくても通れない道はない

いのちの親が作られた道はなるほど厳しい道だ。厳しいが、通れない道ではない。通れる道だからこそ通りなさいよと言われる。がけ道も坂道もデコボコ道も、われわれ子どもが通るために作られているのであって、どのような道もいのちの親が連れて通ってくださいるのである。この道を通ればそこに光がさしてくる。幸せがそこにおのずから生

まれてくるのであります。

1 2 取越し苦勞はいらない

もう間もなく夏が来る。夏物を用意しておいてやらねばーと、親は夏の来ることも、暑くなれば涼しい肌着のいることもよく知っている。子ごもは無関心であっても、親はすべてを知っているから、子どもの知らないうちに夏の用意をする。神は親である。ゆえに神は何事も知って、必要なものを神の子に用意してくださっている。おいでになる、取越し苦勞はいらない。

1 3 お互いに悲しきときがありしともみ親はつねに守ります

1 4 幾万のあだなす人がありしともいのちの親は救いします

15 縁結び誰がするかと思うなよ神の力で神がするなり

16 艱難辛苦があればこそ前進できる

苦勞艱難する人は辛いでしよう、絶えず肉体を患う人は辛いでしよう、借金の言い訳、間借りをして追いつて立てられる、それは辛いでしよう。しかし、その艱難苦勞があればこそ前進できる、改革できる、改造ができる。

私の人生行路はなかなか厳しく、死を決心したこともあります。そうした苦難にあった時、迷いの心、弱い心が起きたが、それを思い直し、思い直しして乗り越えていくのです。

苦難ということではなくとも、人の言葉によって心がくもったり傷ついたりする。頭から下肥をかけられたこともある。この馬糞野郎と罵倒されたこともある。その時、大根でも肥をかけられて太る、これで私の魂も太って有難い。馬糞（を）やろう（野郎）とおっしゃれば、喜んでいただきます、そしてジャガイモの肥料に置いて帰りま

す（笑）。きつい言葉をかけられると、よく励ましてくださって有難うと感謝する。苦勞しているときは、自分のよい歴史をつくっているとさえ思えばよい。

17 難有って、有難い

人生行路における“難”は苦しく辛いものでありますが、その“難”によって力をつけていただくのであります。いかなる“難”をも克服していけば、結果として“有難い”ことになってまいります。ですから“有難い”という文字は“難有り”と書くのであります。難有って有難い、文字通りであります。

ところが“難有り”という時に臨みますと、心が動揺する、そして迷信に走ってしまうのが人の常であります。神仏に手を合わせれば救われると聞くと、溺れる者は藁をも掴むの例えのように、神頼みに走りがちであります。これは実に弱い心であります。弱いから迷う

苦しい時の神頼みであってはなりません。苦しい“難”に遭ったことをなげかず、

どんなに苦しくとも迷わず、この苦境を打破していく勇氣を持って、心を強く正しく明るく清らかに前進せよーと、いのちの親がこの難を与えてくださった。この難関を突破することによって“力”が授かるのだーこう悟っていかなくてはなりません。

18 雨もあり嵐もありて草も木も強く正しく伸びてゆくなり

19 のびのびと伸びゆくなかにひと苦勞そこに大きな慈愛あるなり

20 明日どんなことが起きようとすべて神の配慮

逃れようとしても来るべき困難はやってきます。現に多くの会員が困難に取り組んでいます。私はこれまで、捧誠会で勉強していれば病気にならずにすむと教えたことは一度もありません。災難が避けられると言った覚えもありません。艱難辛苦も神慮の試練であると言ったはずです。捧誠会に一生懸命になっていれば備えができたと考えて

空頼みするのは迷信であります。

私自身、明日の朝には血を吐くような試練が待っているかどうかは知りません。なれども今夜はゆっくりお風呂に入って、やすらかに寝ます。明日にどんなことが起きようと、すべて神の配慮と信じているからです。通らねばならぬ道筋はいやがおうでも通らねばならぬし、また通していただけるのだと信じているのです。安心していいのです。

21 ほめられたら反省、しかられたら感謝、行き詰ったら実行

22 自分に向かって言われたことでなくても

目に映り、耳に聞こえてくることは、すべて教科書として学び納めていかれるようにと言うて、常日頃皆さんに教えております。あの人が言われているんだ、私が言われているんじゃないんだというように思わず、自分の学ぶべき、行うべきことを教えてく

ださるんだなと受け止めてください。

自分の方に向かって言わなくとも、向こうに向いて言うていても、その言葉を耳で聞かせていただく、また人の言動を目で見るということは、そういうようにしていきなさいということをお自分に教えてくださっているんだなと受け止めることが大切であります。

23 天に口なし、人をもって言わしむ

昔から、

―天に口なし、人をもって言わしむ

と言われております。神様は人の口をもって戒め、人の姿や万物をもって善悪を教えられているのであります。それが証拠に「神」という文字は、「示し申す」と書きます。神様は示しておいて、わかるように、早く気が付くようにしてくださっているのです。飛行機は、厚い雲の中でも、自分を誘導してくれる電波をキャッチして、その電波に導かれることによって、方向を誤ることなく、目的地に飛んでいきます。

24 目の前に現われることのすべてが教えてくれる

多くの人がその言動によつて教えてくださる。鳥畜類も教えて下さる。地球の運行による春夏秋冬の変化が教えてくださる。さらにまた雨や風も教えてくださる。万事万端、私達の目の前に現われてくることが魂を磨くための教科書であることを忘れてはなりません。

25 子供が寝ているのではない、神が寝かせてくださっている

子供が怠けて昼の日にねころんでいる。その姿を見る親の心には不平と不満とがわき起こる。おさえきれなくなつてどなりつけることになるのだが、ここで思い方と考え方とを切り替えてもらいたい。

すべて神の子である。神の子であるという点では親も子も変わらない。人間の目から見れば、子は怠けて寝ているとしか見えないが、子供が寝ているのではない。神が寝か

せてくださっているのだ。神の思し召しによって寝かされているのだ。こう悟ると世の中は一変する。不平、不満はたちまち解消する。

26 妻が病んでいるのは

—私は正しい、私は間違っていない、という思いこみは我執である。当人は信念とされているが自己流の信念ほど厄介なものはない。天地自然の法則という定規に合わせると、狂っていることがよくわかる。

例えば妻が病んでいるのは、夫をはじめ家族一同が教科書として反省しなければならぬ天示の範例である。だから家族一同にとっては、一人の患いはまことに尊い。思いここにいたると、病んでいる妻が家族一同のためには恩人であることがよくわかる。

この恩人に対して、「お前が悪いのだ、お前の因縁だ、お前の行いが間違っていたのだ…」などと責められない。どこまでも感謝あるのみである。一同が反省のまことを寄せる、これが最高の看護である。

27 病む人よ病まれる人よ二方よもとをただせば一つなりけり

28 「あつちも降っているよ」

（一人の古い会員さんが、先生の少年時代のエピソードを、聞き書きとして記録しています。）

ある日のこと清太郎少年が街へ出かけた帰り道、にわかには空模様が変わって激しい雨が降り始めました。雨具の用意のない清太郎少年は、片手で着物の裾をからげ、片手で顔に当たる大粒の雨を避けながら、急ぎ足に帰っていると、同じ道を歩いていく一人の青年があります。傘もささず、帽子もかぶらない頭を雨に打たせるままに、ゆっくり歩いてるのは、隣村の顔を知っている青年です。いつも口の辺りに人のよい笑いを浮かべているこの青年は、村の人たちから侮られ、白痴扱いされていました。

「早く帰らないと濡れてしまうよ。」

清太郎少年は追い越しながらそう声をかけました。するとその青年は言いました。

「ありがとう、でもあつちも降っているよ。」

そして相変わらず満足そうな笑みを浮かべて、同じゆっくりした歩みを続けるのでした。

清太郎少年はその晩、床に入ってから、ふとその白痴と言われている青年の言葉が思い出されました。雨の中を傘もささず、着物も濡れるにまかせながら、人がどんなことを言おうと、自分の行く道はただ一筋と思いつめたように、急ぎもせず、遅れもせず、悠々と歩いて行くその青年の姿がはつきりと浮かんできたのです。

「あつちも降っているよ」

人は目の前の苦しさから逃れたい一心で、もがきにもがき、焦りに焦るが、雨が降っている時は、あわててみてもあつちも降っているのだ。清太郎少年はこの白痴と言われている青年の静かな言葉と静かな歩みを考えているうちに、突然一つの啓示を受けたように思いました。あの静謐で着実な歩み、あれこそ自分に示された、自分の道を歩む

べき姿ではないか。

清太郎少年はその時初めて、目に見、耳に聞こえる、何気ない人の動作、言葉の中にも、明らかに自分に示される尊い教訓が含まれていることに思い至ったのでした。

29 毎日が天地の理法を師とする学びの道

皆さんの前には数々の「みおしえ」があります。これは天地自然の理法を学び修めていくための字引きのようなものです。人は誰もが等しく神の子でありますから、天地の理法を師としていくことが唯一最高の道であります。

東海道筋を歩きつつ、私はいろいろなことを学びました。それはもう四十余年も昔のこと、だからもう出居清太郎は学び尽くしたのかと言うと、決してそうではありません。今日もなお、毎日が学びの道であります。自然の動きの中に、人の言語動作の中に、時々刻々と学びのための教科書がくりひろげられているのであります。

平和建設を目指しつつ、こうして私はこの一生を学び続けていくのであります。

我々の經典は、文字に書かれざる天地自然の法則にありーこういう大きな心、高い目をもって進んでください。

30 真心から、信念を持って行こう

私は青年時代から 森羅万象ことごとくを讀本・教科書として学び修め、声なき声で心で聞き、両眼と両耳を通して、古きをたずね新しきを学ぼうと、及ばずながら今日まで努力してきました。皆さんには森羅万象を教科書とすることは難しいことでしょうが、他人の言動を通じて勉強することはできるはずですよ。

どんな言動に接してもあたたかく見つめること、その人の言動をどうのこうのと批判する前に、その人の気持ちをもっとすること、そしてその人の欲するものを差し上げることに、これが第一歩ですよ。

若い頃は気が短いものですから、あたたかくみつめるよりは、是は是、非は非、正は正、邪は邪として断定したいものです。そしてそう断定した己の正しさを信じて疑

わないのです。しかしそれは直情であつても、ゆとりがないのです。

私の青年時代にも、そのように自分で裁いてしまうことがありました。そのために学べたわけですが、同時に苦しい長い道でもありました。

心の底に真心を持って、信じて行えば、身心ともに必ず救われるし、物心ともに健全に恵まれるという信念を持ち、その信念に裏打ちされていたから、気の短い、一本気な私でも、学べることが学べたと言えます。

皆さんもこの信念を持って人の言動に接するという根本だけは忘れてはなりません。

この信念が、濁った魂を磨いてくれます。そして浄められ、清らかになった魂は、人の言動をあたたく見守るだけのゆとりを、自分の心に与えるものです。

3 1 春を楽しむに丹精する

親子兄弟が仲良く暮らしている姿は美しいものでして、真に人の和は花です。平和な家庭にはまた新しい花の芽も育ちます。この花を咲かせるためには、両親の長い間の

努力があり、おじいさんおばあさん方の功績もあります。そしてもっと大切なのは、いのちの親から頂いた種・根・糧のあったことです。親の努力を認識している方は若い人にも多いのですが、このいのちの親から頂いた種・根・糧にまで目を向けている方は少ないようです。

いつどんな種がまかれるか、それはいのちの親にお任せしていただければいいのです。皆様が行うことは、しっかりと根が張るように、心を耕したり、霜や虫に痛められないように丹精したりすることです。

環境に順応して、良い方に、良い方にと解釈する、これが人の行う丹精です。冬が来て、花が枯れてしまった時にこそ、春を楽しむに丹精してください。

皆様がたとえ気がつかなくても、陽の光があまねくそそがれています。時期が来れば種はきつと花を咲かせます。咲いた花に、いのちの親の恵みを見出した時、本当に感謝ができるのです。

補遺 心に唱えることば

折に触れ心に唱えることによって、魂にやすらぎが得られ、心に元気がわき、行動の指針が与えられることばがある。(編者つぶやき)

1 心に唱えることばA―進み行こう

- (1) 日々に新たに
- (2) 万霊万物尊愛
- (3) 環境に順応
- (4) 他自ともに
- (5) 足りないところを足す
- (6) 通れない道はない
- (7) ほほえみながら努力ませ

(8) いずれ花咲き実りくるなり

2 心に唱えることばB―見つめる

(1) つきたての餅のような心

(2) ナスの種を蒔いて、ウリはならない

(3) 松の木は曲がったままで真つすぐだ

(4) ええように受け取る

(5) 二つで一つ

(6) 難有って有難し

(7) 合わせ鏡、人がまねしてわれに示せり

(8) ほめられたら反省、しられたら感謝、行き詰ったら実行

3 心に唱えることばC―祈る

(1) あめつちの めぐみゆたけく きわみなく

ひかりあまねき うつしよに

かみのことして うませたまう

このことわりを いまここに

こころのそこより さとりつつ

(2) こころのとびら おしひらき

いささかも ふへいをおもわず ふまんをいわず

おやこはらから うからやから

もろびとたちに いたるまで

おのれをむなしくして

あらそうことなく したしみかわし

とくをひとつに こころをむすび

(3) つかずはなれず

ことたまのまにまに みおしえをまもりつつ

きょうよりはじめて

まことのみちを ふみおこない

まことのわざを よろこびはげみ

へいわせかいの いしずえとこそ つかえなん